

人文科学、表現文化における 「民族誌的転回」をめぐって Toward Ethnographic Turn

上野俊哉・研究代表者 表現学部表現文化学科

「民族誌」といった概念や方法からはしばしば拒絶され、抑圧されるような想像的、物語的な記述や、ロマン、フィクションの方向に向かうような情動や感性すら、ここでは見なおされていくことになるだろう。つまり、あるメディアやネットワークのなかで、あるいは祝祭やパーティ、デモやカーニヴァルのなかで、その生きたグルーヴ（ノリやリズム）に徹底して埋没し、熱狂さえしながら、ぎりぎりのところで分析的、反省的知性をとぎすますような身ぶりをきたえあげる、そんな方法ならざる方法を模索しようということだ。

社会学者ポール・ギルロイや人類学者ジェイムズ・クリフォードにならって、この理論的実践の場を「詩学」（ポエティクス）と「政治（学）」（ポリティクス）が出会いなおす「制作」（ポイエーシス）の場と言ってもいい。

とくに和光大学では、アカデミズムの言葉と生活世界の言葉が、研究／教育の現場でも著しくへだたりをもって機能していること、どちらのサイドにも多くの無理解と誤解、誤読と不勉強があるように見受けられ、そうした意味でもこのプロジェクトは意図的に仕掛けられた一つの実験であった。

二〇〇三年度には今回その記録の一部を発表する二人の海外ゲストを招き、講演、ワークショップ、フィールド調査などを行なった。この他には、二〇〇三年一月二日に奄美大島の名瀬市公民館で、「奄美自由大学」と合同共催で特別フォーラム「群島へ学び逸れる」（基調講演山口昌男／前札幌大学長、元東京外国語大学教授、パネリスト今福龍太／札幌大学教授、奄美自由大学主宰、上野俊哉／本学教授）を組織、運営した。このワークショップやフィールドワークの記録は近々に一般のメディアに出版され、関連するイベントも二〇〇四年度中に和光大学で行われる予定で次年度へのプロジェクト継続も決定している。



特別フォーラム「群島へ学び逸れる」
（名瀬市公民館 2003年12月）



まえがき

ここにあげる二つのテキストは、和光大学総合文化研究所2003年度重点研究プロジェクト、「人文科学、表現文化における〈民族誌的転回〉をめぐって」（Toward Ethnographic Turn）の成果の一部である。

このプロジェクトがとりくんだのは、近年の人文科学、社会諸科学における「民族誌」的方法への関心と参照を、様々な表現文化や文化の政治（Cultural Politics）のわから理論的かつ実践的に研究することであった。

人文諸科学は言語論パラダイムや構築主義の言説によるインパクト（言語論的転回）、グローバル／ローカルをつらぬく空間への強い関心（地理学、場所論、都市論その他）によるインパクト（空間論的転回）をへて、今や身の回りから「遠隔地」にいたるまでの空間を、単なるフィールド（調査対象）としてのみならず、もう一つの日常生活世界、今ここにあり、自らが属する生きた世界のかたわらにある、もう一つの日常生活としてつかまえる試みに向かいはじめている。これをかりに「民族誌的転回」と呼んでみようというわけである。

制度的、因襲的、アカデミックな領域で語られる「調査」「フィールドワーク」「民